

〔新刊紹介〕

『津輕舊記伝類』

（みちのく双書 第五集）

羽賀 興七郎

『津輕藩舊記伝類』は昭和三十三年六月「みちのく双書才五集」として青森県文化財保護協会より公刊された。本書は八巻からなり、今固合本一冊として発刊されている。刊行委員成田末五郎氏の解説がその巻頭に掲げられているが、最近弘前市八木橋武史氏の御好意により、編者の一人である故下沢保躬氏（一八三八—一八九六）の自筆の草稿と本書編纂の動機を述べた彼の遺文を読むことが出来た。筆者はそれを読み深く感銘したのである。

彼の履歴は「下沢保躬年表」として青森県養書才四編『津輕古今偉業記・津輕要業記』に收められている。幼にして国学を修め、藩の公用方書記となつて京都に滞在するや、近衛忠深の歌道門弟を

許され、明治四年には弘前藩神社調の調査をなして弘前藩における神仏混濁を分離し、また建白して和歌詠進を一般国民にも開放する勅題が明治十年の歳首より始まつたのも下沢に與うところが多い。明治十一年五月国粹小社岩木山神社の弥宜に補され弘前神道事務長となり敬神思想鼓吹に尽された。この間『津輕藩舊記類』、『津輕藩舊記伝類』の編者の一人として活躍している。また文部省編『日本教育史料』は明治二十三年発刊されているが、同書に編入すべき旧弘前藩学校の調査を青森県より全二十二年依頼され、工藤主膳等と調査上申している。以上述べたように下沢は明治中期における津輕地方における弘前藩史の權威者であり、その経歴の示すように、『津輕藩舊記伝類』の編

筆動機を説明する遺文は極めて興味深いものがある。その全文を掲げることそれ自体有意義と思われるので原文のまゝ、讀者にさへは度いのである。

此書八冊全篇之成レル由縁ハ、初明治四五年ヨリ文部省ニ一局ヲ設ケラレテ修史局ト称ス。

然シテ川田剛ヲ以テ局長トス。此時剛ノ属僚十二人ヲ命ゼラル。保躬其ノ中ニアリ。明治ヨリ太政官ニ屈セラレテ修史館トナルニ至テ政大臣或ハ井知地正治ト之ヲ總裁ヲ命ゼラル此時我カ藩ノ正史実録タルモノ一冊モ局中ニ上申ゼルモノナク又參考トナルモノナクシテ、却テ局中ニ之レ下ルモノハ我カ藩祖爲信公ヲシテ叛臣逆臣傳トナスヘキモノニテ、又累代ノ忠公ノ美惡傳續ノ廟堂ノ正史ニ記載トナルモノナシ。タマタマアレハ又以藩侯ノ名ヲ汚スヘキモノアリ。保躬悲泣慷慨天地ニ慟哭スルシテ止マス。遂ニ四位公ハ十二代藩主承昭ニ謁スルコト數回、事情ヲ陳上スル極メテ反覆丁寧ヲ盡セリ。公大ニ感歎シ玉ヒテ膝下ニ侍スル慶也。遂ニ決議シテ命スルニ云々ヲ以テス。於是、予官暇ヲ乞賜ヒ藩地ニ下

着ス。保躬十六才ノトキヨリ記録騰写セルモノ及ヒ遍ク藩記及ヒ日記又藩家所ノ私記録ヲ借覽騰写セシメ、又ハ或ル凡テノ記録ヲ網羅シ、之ヲ東京ニ致送シテ兼松成言・樋口建良・予ト三人評議論決、其粗ヲ又テ精ヲ取テ以テ一大歴史ナル。是即、句津輕旧記類纂ナリ。全部三十五。明治十一年五月ニ至テ全部ヲ四位公ヨリ太政官へ上申ス。後同十二・三年中修史館ヨリ命アリテ、維新勅王諸藩ノ世家列傳ノ成切ヲ急ニスト。困リテ早ク其藩主ノ世家及ヒ藩士三民ノ列伝トナルヘキモノヲ上申セリト。於是君家系世ノ世家及公族ノ伝教冊ヲ上申スニ付、其書ハ建良及藤田貞固等公命ヲウケテ成功ス。斯ニ此書ハ樋口ト予ト命ヲウケタレトモ、予岩木山神祇ノ神官タルヲ以テ其事ヲ成ヌ、十ノ八九ニモ及ハス。樋口・藤田悉ク其功ヲ遂タリ。其書ハ即今此八冊ナリ。然レトモ或旧大小参事等數人及小山内建麿ト予ニハ其議ニ預ルコト一モ洩サルナリ。書成テ清書三部ヲ成就セリ。今此八冊ハ

草稿ノ真効ナリ。予乞テ批薦スルモノナリ。

又曰ク此書ノ全部ハ悉ク津輕旧記類纂ノ

抜萃ナルモノナリ。只之ヲ部分セルモノハ君

命ト修史館命トニ因リテ記セルモノナリ。一

王私論僻説ヲ用ヒサル也。他年廟堂ノ正史歟

ニ其功・無功ハ千歳ニ遺伝スベシ。因テハ子

孫達テ此書ヲ他人ニ貸シ或ハ見セシムルコト

アルコトナカレ。

明治十六年夏

下沢保躬

(修史館は筆者による)

右の文中修史局・修史館設立の時に因して誤解

があるため周知のことであるがその沿革を述べた

い「『東京帝国大学五十年史』下巻・坂本太郎」

日本の修史と史学』による。明治二年三月朝廷

修史の事業を起さうとして史料編輯国史校正局が

東京九段坂上の旧和学講談所に置かれ、同年五月

国史編輯局を昌平校内に設けて、史料編輯国史校

正局を遷止した。昌平校が大学となるや、同局は

大学校に属し、その後国史編輯局は一旦閉鎖され

たが、明治五年十月太政官正院に厂史・地誌の二

課を置き、翌六年五月太政官職制の改定により、

歴史課は内史に属することになった。明治八年四

月正院の職制を改定し、歴史課を改めて修史局と

称した。明治十年一月修史館と名をあらため、太

政官に属している。明治十九年一月修史館を廃し

、十八年より太政官を改組した内閣直属の臨時修

史局が設けられている。二十一年十月臨時修史局

は廃止られて修史の事業は帝国大学（今の東大）に

移された。帝国大学ではそのため臨時編纂史編纂

掛をおき、明治二十三年九月内務省地理局地誌課

の事業が帝国大学に移管したため十月地誌編纂掛

が設けられたが、明治二十四年三月これをあわせ

て史誌編纂掛と改称した。明治二十六年四月史誌

編纂事業を停止したが、修史事業の重要性より明

治二十八年四月帝国大学文科大学に史料編纂掛を

設けて復活したのである。専ら史料を編纂するこ

とで再出発したのであった。

明治三十八年三月東京帝国大学文科大学に史料

編纂官・全補・史料編纂書記を置く官制が出来、

大日本史料・大日本古文書これに附随する書類の

編纂がその目的であった。大正十三年九月には増

買行われ、昭和四年には史料編纂所と改稱され、昭和二十五年東京大学附置の研究所となつて、制度上の相違があるが、その目的は旧と変わらぬものである。以上は史料編纂所の沿革の概要である。

『津輕承昭公傳』(頁三七五―三七六)によれば明治七年八月修史官川田剛・重野安釋等朝命を奉じて後小松天皇以降の歴史を編纂するため資料を全国的に集收しようとする計画あり、下沢はその補原であつたので、藩主承昭(十二代藩主 元弘一五九六)に対して、この機会を以つて、弘前藩の事蹟を編輯して国史編纂の資料となし、反面弘前藩の功績名声を揚ぐべきを進言し、許を得て資料を領内より集め、これを樋口建良に調査せしめ、兼松成言に校正せしめ、明治十年春草稿となつたものが『津輕旧記類』である。この年六月下沢・樋口・兼松の三人は旧藩主津輕承昭よりこの感状を頂いている。

予が家ノ記録、高岡公(四代藩主 信政)御在世中、諸書ノ誤傳ヲ改正シ、文庫ノ秘書及諸士の果印、感状并民間ノ古書、古老ノ伝説等若干冊

ヲ編集セラレタリト。然レドモ、其書類兩度迄火災ニ罹リ、世ニ傳ルモノ尠シト聞、實ニ千載ノ遺憾ト云フベシ。其他、諸家数種ノ記録アリト雖ドモ、其首尾完全スルモノ或ハ尠シ。茲ニ、下澤子辰ニ輯纂ニ志アリ、遍ク我が旧記ヲ聚メ、兼松・樋口ノ二子ト恒共ニ校閲校正、日夕編纂ニ從事シ、遂ニ昭和年中ヨリ明治四年ニ至ル為年七百七十餘年、為世二十有六、祖先ノ偉勲、孫謀歴々著明ニシテ無窮ニ傳ルコトヲ得タリ。抑、此書ノ成ル、下沢之ヲ草創シ、樋口之ヲ討議シ、兼松之ヲ修飾シ、三子ノ力功、予實ニ是ヲ嘉尚シ、適々此冊子ヲ閱スルニ逢フ、仍テ以テ茲ニ附言ス。

明治十年仲春ノ日 津輕承昭

この感状の文句は『津輕旧記類』の内容を詰つて十分である。筆者の知る限りでは草稿は弘前圖書館に所蔵され、またその写しは小樽商大事務局長田名部貞宣氏が所有している。

明治十一年五月修史館に旧藩主よりこれを校訂淨書したものが献上されている。すでに述べたよ

うに十一月一月には修史局が修史館と改稱されて
いるのである。

下沢の遺文中修史館の沿革と相違する箇所があ
るが、修史官川田剛の遺傳であつた下沢は当時太
政官にある津輕藩医係の資料は貧弱にして例え
あるにしても、寛政重脩諸家記の如く藩祖論信
を南部家の友臣として記録した文書あり（同上才
二輯頁五二―五三）、また十代藩主信順が文政十
年（一八一七）四月將軍家育の太政大臣昇進祝賀
の節翰を使用して還鑒を命ぜられた事件等藩主の
名を活すものあり、零代藩主の美徳・偉績の正史
に記載すべき事項の知られざるを悲泣憤慨し、藩
主承昭に進言、許可を得て歴代藩主の治績に關す
る資料の蒐集整理することになり、そのため官を辞
して郷里に歸り、兼松成言・樋口建良兩人の協力
を得て完成したものが、津輕旧記類に於て、
津輕氏の始祖秀榮以降明治四年廃藩にいたる各藩
主を中心とした藩政の要約であり、編纂者の下沢
・兼松・樋口の三人は弘前藩史の權威として知ら
れてゐるため、津輕旧記類には資料として使用

出来る貴重な文獻と言わざるを得ない。

その後修史館より命あつて、維新の際勤王諸藩
の客界の指導者の託命を求められ、それに応じて
完成したものが津輕藩旧記類であり、編纂
者は樋口建良・藤田貞吉・下沢の三人であり、下
沢の遺文によれば、彼は当時神宮であるため、本
書の成立に対し大部分は藤田・樋口の貢うところ
であると言へてゐるが、協力者であることは疑
う余地がないであらう。本書の特徴は資料の集成
であつて、編者の主観が混入してゐないことであ
り、そのため各人の記述に粗密があり、所謂伝記
物とは違ふことであらう。従つて各人の評伝を知
るには本書のみでは不十分であることも注意を要
する。資料の繰りどころを明記してゐるため、弘
前藩における人物調査に關しては貴重な文獻であ
ることは議論の余地がない。かくして明治十三年
八月修史館に提出されてゐる。津輕藩旧記類は
藩主の治績を中心とし、津輕藩旧記類は
藩士の功業を中心として、編者の主観を混入せず
出典を明記した資料の要約集成であるが、前者を

正編と呼ばへ、後者はその続編と称すべきであらう。『津輕藩旧記伝類』は八冊よりなり、才一巻は公族の部、才二巻は公族の部と夫人の部からなっている。公族とは津輕家一門である藩士であり、夫人とは藩主の夫人である。才三・四・五・六巻は藩士の部で、藩士として著名なものの伝であり、才七巻は文部の部、兵学の部、弓術の部、馬術の部、劍術の部、槍術の部、炮術の部に分れ、各部内における津軽の藩士の列伝であり、才八巻は諸帖の部、孝義の部、勲褒の部、医師の部、歌人の部、書家の部、画師の部、僧侶の部、茶道の部、五芸の部、俳諧の部、友人の部に分れて各部の指導者の名が見出される。最後の友人の部に三人の名があり、慶長五年の岡ヶ原の戦に、藩祖為信の出陣中津輕において西軍に内応した藩士の列伝であり興味をそよめる記号である。

本書に登場する主要人物は六四人、さらに関係者を加えると二八人。人余であり、これらの人物の中には森鴎外の『浮城物語』で知られた渋江道純、山貞伝上人東城念仏利益伝にすぎ全国的に

知られた青森県今別町本堂寺才五世の貞伝和尚、江戸より津軽までの絵入の道中記等を著し、谷文晁・伊勢貞丈等と親交ありし平野貞彦、俳諧と南画で著名な建部綾足、龍溪に臨本を呈した沢田東里の高弟平井東堂、剣道では中西忠兵衛の高弟である柿崎謙助、中里介山の才丈若薩峠で知られる弓術の才三之助、兵学者の山野十右衛門、山鹿素行の高弟山鹿八郎左衛門・磯谷十助、茶道で知られた才重詞義法に著者の野本道玄等の名も見出される。

『津輕藩旧記伝類』とその続編ともいうべき『津輕藩旧記伝類』の成立の経過を詳述する下次遺文を紹介し、この遺文中には修史局と修史館の設立に關して誤記があるため、筆者は史料編纂所の沿革を、詳しく述べ、つぎに『津輕旧記伝類』の内容の大要を述べた。すでに述べたように此の書の成立の動機は藩士の功業顕彰にあり、編者は何れも当時における藩史の権威者であるため、私恩を加えることを差控え、出典を明記した資料の要約集成をもつて編じたものである。そのため文献

的意義が極めて高いと評価される所以である。弘治
前藩史に活動する主要人物研究のため必読の書と
いわざるを得ないのである。強いて難を指摘すれ
ば出典乏しいもの、信憑性を検討することからまじ
い。原資料の散失せる今日これを遂行することは
極めて困難であろうと思われる。

(青森県文化財保護協会刊、A5判、四九四頁、定価四〇〇円)